

# 日本人英語話者をロールモデルにした自己像と英語学習意欲の促進—メディア教材LMSを介した授業実践—

## Fostering an L2 Self-Image and Motivation Through Japanese English-Speaking Role Models: An LMS-Mediated Class Activity

小笠原麻衣子

Christopher Prowant

阿南工業高等専

ロールモデルとなる英語話者が少ないELF環境では、学習者が英語話者としての自己像がイメージできるような情報提供の重要性が強調されてきた。本研究では高専で行われた、ロールモデルとなる日本人英語話者をLMS(Learning Management System)上で映像提示した活動の実践報告を行う。LMS活動後に提出させたレポートを「L2(第2言語)動機づけ自己システム論」(Dörnyei, 2009)を枠組みとして分析し、当該活動が、生徒のグローバル社会における将来的な自己像のイメージを促進し、英語学習意欲を高めたかを検証した。その結果、活動を通じて、生徒がある程度はグローバル社会における自己像をイメージでき、限定的ではあるが英語学習意欲の向上も確認できた。教師は生徒が過去の学習経験の枠を超える活動を導入する必要があり、そのような活動が、ポジティブな英語話者としての自己像の形成、また幅広い英語学習体験への関心や学習意欲へとつながることが示唆された。

Promoting learners' self-image as English speakers is crucial in EFL environments with few English-speaking role models. In this study, one such role model was presented to students in a video utilizing an LMS (Learning Management System) at a national college of technology (KOSEN). Following the activity, student reports were analyzed using the "L2 Motivational Self System" (Dörnyei, 2009) to investigate the effect on their future self-image as an English speaker, as well as their motivation. The results indicate that this activity enhanced students' positive L2 self and raised their motivation to some extent. This study suggests that teachers should implement activities that guide students beyond their limited learning experiences. Such activities help students form a positive self-image as an English speaker and open their eyes to various English learning experiences.

<https://doi.org/10.37546/JALTTLT49.2-3>

### 研究の背景

#### 高専(高等専門学校)における英語教育カリキュラム

高専は、高等学校と同じく、中学校を卒業した生徒が入学することができ、5年の一貫した技術者としての専門教育を受けられるのが特徴だ。全国に51の国立高専があり、カリキュラムは国立高専を統括する国立高等専門学校機構(高専機構)が策定したモデルコアカリキュラ

ムを基にそれぞれの高専が作成する。英語教育については、1~3年生は日常的な話題や社会的な話題について、情報や考えなどを理解して表現できることを目標とし、高等学校指導要領に準じた語彙、文法および構文の習得や実践的な活動を実施している。さらに、3~5年生では、自分の専門分野に関するトピックについても意見交換ができることを目標に、ディスカッションやディベートを授業に取り入れている(高専機構,2023)。

#### 英語学習意欲の維持とグローバル社会の技術者としての自己像

高専では5年間に渡り英語学習意欲を維持し、グローバル社会の中で技術者として求められるレベルの英語運用能力を身につけなければならない。しかし、高専1年生の中で入学時の学習意欲を1年生の学年末まで維持できた生徒は40%に留まり(西原、石原他、2010)、高専3年生は、将来の仕事を見据えた英語学習や資格取得の必要性を認識しているものの、目標達成のための学習意欲は欠けている(大里,2020)。その原因としては、どの程度の英語能力が将来的に必要なとされるのか想像しにくい、学習意欲に繋がらないことが挙げられている(山崎、村端他、2023)。

このような高専生の現状を踏まえると、技術者としてグローバル社会の中で要求される英語能力をいかに認識させ、それを学習意欲に繋げるかが高専英語教育の喫緊の課題と言えよう。

#### 先行研究

グローバル社会を生きる技術者としての自己像を形成する枠組みとして、Dörnyei (2009)が提唱した『L2(第2言語)動機づけ自己システム論(L2 Motivational Self System)』という概念が挙げられる。『L2動機づけ自己システム論』は以下の3つのモチベーション要素から成っている。

- 「理想L2自己(Ideal L2 self)」なりたい自己:L2を身につけた理想の自分と実際の自分との差を縮めようとする強い動機づけ。
- 「義務L2自己(Ought-to L2 self)」ならなければならない自己:他者の期待に応えるため、または悪い結果を避けるための動機づけ。

- 「L2学習体験(L2 Learning Experience)」学習環境や経験:教師やカリキュラム、クラスメイト、個人的な成功体験などの外部環境から発生した動機づけ。

「理想L2自己」は3つの要素の中で最も強い動機づけであり、世界のあらゆる地域で、理想L2自己を持つ学習者の学習意欲が高いことが報告されている(Kojima & Yashima, 2017; Taguchi, Magid, & Papi, 2009; Ueki & Takeuchi, 2013)。一方で、EFL環境では「義務L2自己」が学習意欲を高揚させているとも議論されてきた。例えば、日本の学習者が考える高い英語能力とは、仕事で英語を使いこなすことではなく、キャリアで成功する過程において試験で高得点を取ることをイメージする傾向にある(Taguchi, Magid, & Papi, 2009)。このような、教育環境の違いによる「義務L2自己」についての概念の相違を解明するために、Teimouri (as cited in Takahashi & Im, 2020)は義務L2自己を内在化の程度によって以下の2つに分類した。

- 「義務L2自己/own」:外発的な要因がきっかけではあるが学習者がその要因を価値あるものとして内在化できている。
- 「義務L2自己/others」:完全に内在化されていない状態で学習者が影響を受けている、親や学校からのプレッシャーのような要素。

前述のようにキャリアでの成功を目的とし、試験で高得点を取るために高まった学習意欲は、「義務L2自己/own」に分類され、外発的な要因がきっかけであっても学習者が内在し確立していくことが示唆されている。

「理想L2自己」を具体的に視覚化できる想像力が重要であるが(Dörnyei, 2009)、日本のようなEFL環境にはL2を身につけたロールモデルが少ない。そのため、学習環境内で教師が生徒に戦略的に将来が想像できるような情報を提供しなければならない(Ueki & Takeuchi, 2013; Yashima, 2009)。これはDörnyei (2009)の枠組みの「L2学習体験」と繋がりが深く、日本人は学習環境の中で英語話者モデルに触れる機会も不足していることから、授業で意識的に不足を解消する必要がある。近年、新型コロナウイルス感染症の影響がきっかけで多くの教育機関でオンライン学習が活用されている。オンライン授業は学習者の学習意欲の維持や促進にも寄与し、特に将来の英語の必要性を認識させるのに有効である(野村・館, 2022)ことから、オンライン学習という新しい学習環境内で理想L2自己をイメージさせるような情報を提供する可能性も示唆された。

### 本研究の研究課題

本研究の調査対象である高専においても、LMSを利用したオンライン学習を行なっている。「理想L2自己」をイメージさせるような情報として、LMS上で専門分野に関わるメディア教材を視聴させた。視聴後に提出させたレポートを、Dörnyei (2009)が提唱した『L2動機づけ自己システム論』に基づいて分析し、生徒の自己像や英語学習意欲に影響を与えたかを確かめる。研究課題は以下の2つである。

1. 専門分野に関わるメディア教材(LMS)は高専1年生のグローバル社会における自己像をイメージさせるか。

2. 専門分野に関わるメディア教材(LMS)は英語学習意欲を向上させるか。

## 調査方法

### 調査対象授業と生徒

筆者の勤務校の高専1年生対象に「英語コミュニケーション基礎」の授業において調査を実施した。前期を日本人教師(筆者)、後期を英語ネイティブ話者の教師(共著者)が担当する通年科目で、1クラス40名の4クラス160名を対象に前期授業(2021年4月~5月)で活動を行った。

### 活動内容:LMSを利用した動画視聴

当該活動では、メディア教材として日本人による英語のプレゼンテーション動画を2本使用した。本稿ではその1本の任天堂の元代表取締役の故・岩田聡氏によるプレゼンテーション動画(GDC, 2015)を見せ、視聴後に提出させたレポートの分析結果を報告する。任天堂は日本の代表的なゲームメーカーで、生徒たちにも馴染みのある企業である。当該高専ではeスポーツ研究会の活動が盛んで、ゲームは生徒たちにとって趣味の域を超えた関わりの深い存在であり、ゲーム開発に関わるプログラミングや情報通信は将来の研究や就職に繋がる分野である。

動画の内容:2005年にアメリカで開催されたゲーム開発カンファレンスでの1時間程度の英語での基調講演の中で、岩田氏は2004年に発売された携帯型ゲーム機「ニンテンドーDS」について話した。当該動画を分析対象として採択したのは、ほとんどの生徒がニンテンドーDSを使用したことがあることから興味関心を持って視聴でき、英語による講演の内容を理解しやすいことが第1に挙げられる。また、岩田氏がEFL環境で英語を習得したロールモデルであることも採択した大きな理由である。

動画視聴方法:動画はLMSにYouTubeをはめ込む形で配信した。視聴は授業外で行い、その際、英語、または日本語字幕付きで視聴しても構わないことを伝えた。

レポート:プレゼンテーションについての感想に加えて、「自分の将来の英語使用などについて感じたこと」を、日本語で200字以上書くこと、採点はしないが全員提出することを指示した。

## 結果

### レポートの分析対象

生徒160名中155名がレポートを提出。140名のレポートに「自分の将来の英語使用などについて感じたこと」にあたる文章が含まれていた。140名のレポートから抜粋された13,085字(1人平均93字)の回答を分析対象とした。

### 分析方法と手順

回答を分類するにあたり、Dörnyei (2009)の『L2動機づけ自己システム論』の3つのモチベーション要素を用いた。「理想L2自己」「義務L2自己」「L2学習体験」の3要素である。その中の「義務L2自己」については、Teimouri (2017)が細分化した「義務L2自己/own」「義務L2自己/others」を

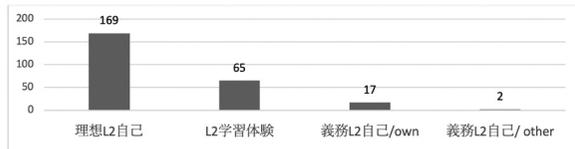
用いた。つまり、「理想L2自己」「L2学習体験」「義務L2自己/own」と「義務L2自己/others」の4要素を分類カテゴリーとした。

まず、抜粋した回答から、前述した4要素を含んでいる文章を抽出した。次に、それらを4つのカテゴリーに分類した。ほとんどの場合、1人の回答者が複数のカテゴリーの内容に言及していた。

### 分析結果

分析対象回答13,085字のうち約8割に当たる10,507字の回答に、「理想L2自己」「L2学習体験」「義務L2自己/own」「義務L2自己/others」の4つのカテゴリーに分類できる内容が出現していた。図1.はカテゴリー別の出現数である。

図1. 4つのカテゴリーと出現数



出現数の最も多かった「理想L2自己」に分類された主な内容を、さらに5つの項目に分けた(表1.)。

表1. 「理想L2自己」に分類された内容の5項目

項目	出現数	%
1. 英語を話すことに関する目標や理想	57	33.7
2. 岩田氏を理想の英語話者として認識	41	24.3
3. グローバル化社会での英語の必要性について認識	40	23.7
4. 将来のキャリアに関する具体的な目標や理想	17	10.0
その他 趣味や国際交流の中での英語使用に関する目標や理想	14	8.3
合計	169	100

出現数が最も多かったのが、英語を話せるようになったという内容であった(項目1)。項目1の話せるようになりたい理由として、項目2は、岩田氏のようにプレゼンテーションをしたいから、また項目3は、グローバル化社会で英語は不可欠であるから、という理由が提示されていた。

項目1の英語が話せるようになりたいと述べた後、その目標達成のための学習についても65回出現した(図1.「L2学習体験」)。話せるようになるために、語彙力やリスニング力を強化する、など具体的な学習計画を述べている回答は、「L2学習体験」に分類された回答65回中30回で、残りの35回は英語の勉強をがんばりたい、のような抽象的な表現であった。

「理想L2自己」に関する回答で、グローバル社会における自己像を窺わせる回答(表1. 項目4)は17回に留まった。少数ではあるが、プログラミング、創業、エネルギー開発など分野を明確にし、その分野で英語を使って活躍したいことが表現されていた。一方、将来の英語使用について言及してはいるが、英語はどの分野でも必須なので身につけたい、就職活動で通用するTOEICスコアを取らなくてはならない、などの回答は、外発的な要因から誘発されているモチベーションであり、「理想L2自己」ではなく、「義務L2自己/own」(図1.)に分類された。

最後に、どのカテゴリーにも分類されなかった2,578語は、英語や英語学習に否定的な回答であった。しかし、岩田氏の講演を見て、自分も英語が話せるようになりたいと思ったなど、前向きな内容が続く場合がほとんどで、全くモチベーションに関する言及のなかった回答者は2名だけであった。

### まとめと示唆

本研究の1つ目の研究課題は、専門分野に関わるメディア教材が、高専1年生のグローバル社会における自己像をイメージさせるか、であった。本活動が生徒の「理想L2自己」のイメージをより鮮明なものにしたと断言はできないものの、レポート回答の8割に『L2動機づけ自己』に関する記述が見られたことから、その一助となったと結論できる。ロールモデルの少ないEFLの場合、日本人英語話者である岩田氏をロールモデルにしたことで、生徒たちは理想L2自己をイメージしやすくなったと考えられる。2つ目の研究課題の専門分野に関わるメディア教材が英語学習意欲を向上させるか、については、自分の学習経験や限られた情報に基づいた学習方法(例:授業を頑張る、単語を覚える)に限定してではあるが、意欲が向上したと言える。しかし、国際交流事業への参加や、旅行やスポーツを通じての国際交流など学校や授業の枠を超えた英語活動に関する回答はごく少数であった。Yashima (2009)は、“Often in Japanese EFL learners’ minds, studying English(e.g., memorizing words, reading texts aloud) is unconnected to the ideal L2 self (p.159).” 「英語を外国語として学ぶ日本人学習者の意識の中では、英語の勉強(例えば単語暗記、文章の音読)は理想L2自己に結びついていない」(引用者訳)と表現している。本研究でも、生徒たちの情報・経験不足は否めず、日本のようなEF L環境では教師が戦略的に生徒に情報を提供し、学習経験の枠を超えた活動に参加ができる環境を整備しなければ「理想L2自己」は促進されないことが示唆されている。

本実践報告からの今後の改善点に関しては、メディア教材を授業外でLMS上で配信したため、生徒たちがどの程度集中して動画を視聴したのかが確認できていない点が挙げられる。メディア教材の情報を生徒に確実に伝える工夫が必要だ。さらに、レポートの中で「理想L2自己」につながる具体的なコメントは、生徒たち全体で共有するべきであった。前述したように、英語でプレゼンテーションができるようになりたいと述べて、そのための英語学習として単語の暗記など従来の学習方法しか思いつかない生徒が多かった。一方で、留学生や外国人の先生に英語で話しかけてみたい、と中学校では体験できなかった方法で英語を使いたいと述べていた生徒もいた。また、将来の自己像に関しても、プログラミングを使ったイベント演出で海外の人にも認められる仕事をしたい、世界中の研究者と協力して薬の研究をしたい、など、具体的にグローバル社会における自己像をイメージできている回答もあつ

た。こうした回答を生徒間で共有することで、生徒たちが他の生徒から学び方のヒントを得る可能性もあり、また、教師も留学生と活動できるイベントの案内や、まだ将来像が曖昧な生徒たちを支援することもできる。今後の研究課題として、メディア教材を生徒に確実に視聴させ、それに対して書いたレポートの情報共有を行うようなシステムティックなサイクルの確立と継続が必要である。その上でメディア教材がグローバルな自己像の促進や英語学習意欲に与える効果の検証が求められる。

### 参考文献

独立行政法人国立高等専門学校機構 (2023) 「モデルコアカリキュラム」 <https://www.kosen-k.go.jp>.

Dörnyei, Z. (2009). The L2 motivational self system. In Z. Dörnyei, Z & Ushioda (Eds.), *Motivation, Language Identity and the L2 Self* (pp.9-42). Bristol, UK: Multilingual Matters.

GDC. (2015, July 14). Satoru Iwata: Heart of a Gamer. (2005, March 11). YouTube. <https://www.youtube.com/watch?v=RMrj8gdUfCU>.

Kojima, N., & Yashima, T. (2017). Motivation in English Medium Instruction Classrooms from the Perspective of Self-determination Theory and the Ideal Self. *JACET Journal*, 61, 23-39.

Magid, M., & Chan, L. (2011). Motivating English learners by helping them visualise their Ideal L2 Self: lessons from two motivational programmes. *Innovation in Language Learning and Teaching*, 6(2), 113-125. <https://doi.org/10.1080/17501229.2011.614693>

西原貴之・石原知英・江口誠・竹山友子・川尻武信・栗原武士 (2010). 「呉高専入学時の英語学習意欲の持続性の調査 1年間の経時データからの考察」『呉工業高等専門学校研究報告』第7号, 81-88.

野村幸代・館深雪 (2022). 「学習意欲を維持するオンライン授業デザインの探求」『四国英語教育学会紀要』第42号, 13-25.

大里浩文 (2022). 「佐世保高専低学年における英語学習の現状と課題」『佐世保工業高等専門学校研究報告』第58号, 13-21.

Taguchi, T., Magid, M., & Papi, M. (2009). The L2 motivational self system among Japanese, Chinese, and Iranian learners of English: A comparative study. In Z. Dörnyei & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, language identity and the L2 self* (pp. 66-97). Bristol, UK: Multilingual Matters.

Takahashi, C., & Im, S. (2020). Comparing self-determination theory and the L2 motivational self system and their relationships to L2 proficiency. *Studies in Second Language Learning and Teaching*, 10 (4), 673-696.

Teimouri, Y. (2017). L2 selves, emotions, and motivated behaviors. *Studies in Second Language Acquisition*, 39 (4), 681-709.

Ueki, M., & Takeuchi, O. (2013). Exploring the concept of the ideal L2 self in an Asian EFL context: The case of Japanese university students. *The Journal of Asia TEFL*, 10(1), 25-45.

山崎英司・村端啓介・Richard T. Grumbine・村田和穂 (2022). 「有明高専における英語習熟度別授業 (3年生) の分析と考察 (3)」『有明工業高等専門学校紀要』第58号, 1-5.

Yashima, T. (2009). International posture and the ideal L2 self in the Japanese EFL context. In Z. Dörnyei & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, language identity and the L2 self* (pp. 144-163). Bristol, UK: Multilingual Matters.

小笠原麻衣子: 阿南高専はじめ徳島県内の大学に非常勤講師として勤務。高知大学大学院人文社会科学研究所(異文化コミュニケーション分野)修士課程修了。研究分野はL2学習者のモチベーション、日本における多言語・多文化教育である。多言語・多文化教育の研究では外国にルーツを持つ家族や学校での聞き取り調査を実施した。



**Maiko Ogasawara** teaches at National Institute of Technology, Anan College as well as other universities as a part-time teacher. She holds an MA degree in Humanities and Social Sciences (intercultural communication course) from Kochi University. Her research interests lay in motivation of L2 learners and multi-lingual /cultural education in Japan. She has conducted field research with multi-lingual / cultural families and schools in Japan.

クリストファー・プロワント: 阿南工業高等高専・講師。米サザンニューハンプシャー大学でクリエイティブライティング修士号取得。日本では高専を始め、小学校など様々な教育機関での調査・研究に参加。研究分野は英作文、L2学習者のモチベーション、EFL学習者用教材。徳島県在住。



**Christopher Prowant** is a Lecturer at the National Institute of Technology, Anan College. He received an MA in Creative Writing from Southern New Hampshire University. He has conducted research with students in Japan from elementary school up to the college level. His research interests include English writing, motivation of L2 learners and EFL-oriented materials. He lives in Tokushima, Japan.